

## 『愛国の教科書』

2020年04月02日

「愛国」という言葉は、右翼的な「ナショナリスト」たちが好んで用いる言葉で、自国の優越性を誇り、他国を蔑む排他的な響きがある。否定的に受け止められていることが多いのではないか。韓国の軍事独裁政権時代、池明観先生がT・K生という名で月刊誌「世界」に「韓国からの通信」を著し、若者たちが民主化を求めて命を賭して闘う姿を世界に発信された。若者たちの思いと行動は「愛国心」に溢れ、その闘いは壮絶で、深い感動と支援を呼び起こした。彼らの「愛国」は、肯定的に受け止められ、同じ「愛国」でもナショナリストたちの「愛国」とは天と地ほどの違いがある。私は「愛国」という言葉を、どのように理解すればいいのか迷っていた。『週刊金曜日』に、『日本国民のための愛国教科書』を著した将基面貴巳氏と中島岳志氏の「愛国」に関しての対談が掲載されていた。早速『愛国の教科書』を読み、「愛国」に関する迷いが解けた。将基面氏の主張を紹介したい。

「愛国」という言葉は、英語で「パトリオティズム (patriotism)」と言う。パトリオティズムの語源はラテン語の「パトリア (patria)・祖国」を意味する言葉から生まれた。「祖国」には「自然的な祖国」と「市民的な祖国」の二つがあるが「市民的な祖国」を重視した。ヨーロッパの国々では、「愛国心」は共和制的な政治的価値や制度を防衛することにこだわる思想・政治的姿勢とされてきた。この姿勢は、愛国心が敵とするのは市民にとって「共通善」を脅かす暴政であると見做し、共通善を実現するため共和制という政治形態への奉仕、忠誠を意味した。従って、愛国者とは多くの場合、反体制派に属する者であった。

ナショナリズムの語源は、ラテン語の「ナティオ (natio)」で、英語のネイションを意味する言葉から生まれた。ナショナリズムは、自らのネイション（国民、民族）の独自性にこだわり、それに忠実であろうとすることである。ナショナリズムは、生まれや文化に根ざしているので、自己愛的な感情に陥ることがしばしばある。日本の近代化において、ナショナリズムは「忠君（天皇に対する忠誠）愛国」として説かれたことは自明である。

パトリオティズムとナショナリズムは、同じ「愛国」という言葉で訳されているが、意味するところは全く違っている。近年では、パトリオティズムは薄れ、ナショナリズムという言葉で「愛国」が捉えられ、主張されていることが多い。

二つの「愛国」は混然一体となっているが、二つの相反する「愛国」をどのように見分けるのかについて、「愛のまなざし」が必須である。自己愛は相手を理解せず、自分の思いで恋い焦がれることであるが、「愛のまなざし」は、相手の良いところを見ようとする愛情に根ざした態度であり、それは、悪いところを見ないのではなく、欠点も理性的に見抜く「まなざし」である。共和国的パトリオティズムは批判的な精神を持って、現実の政治の長所と欠点を認識、評価し、「共通善」を目指すということである。

共和国的パトリオティズムを持つことは、一人きりになっても、集団全体の益に貢献しようとする強靱な意志と犠牲を負う覚悟が必要である。しかしその先に、更に深刻な問題がある。アウグスティヌスは、愛国的な共通善への奉仕、忠誠も、国を偶像崇拝することであり、本当の「祖国」は「天上の神の王国」であると書いている。将基面氏は信仰を持っていないが、「自分にとって死んでもいいと思える世を超えた何かとは一体何か？」と問い、この問いにたった一人で向き合い、答えを掴んだ時、「愛国」という問題を乗り越えているはずだと結んでいる。「愛国」の社会的意義を説きながら、その「愛国」をも相対化する視点に感銘を受けた。